戦国群盗伝

1959. 3～4

上映映画解説

No. 58

戦国群盗伝

P. C. L 1937年(1948年改訂)

原作・台詞……三好　十郎
脚　色……山中　貞雄
演　出……滝沢　英輔
撮　影……唐沢　弘光
音　楽……山田　耕筰

―― キャスト ――

土岐左衛門秀虎嫡子太郎虎雄…河原崎長十郎
弟次郎秀国……河原崎国太郎
太郎許婚小雪姫……千葉早智子
城主土岐左衛門秀虎……阪東調右衛門
家老山名兵衛……橘　小三郎
使者畑山太夫……嵐　芳三郎
百姓娘田鶴……山岸　しづ江
野武士甲斐六郎……中村翫右衛門
野武士……市川笑太郎、市川延司、中村鶴蔵
その他前進座一座

(1937年2月11日、日本劇場等で封切)

「戦国群盗伝」の生れた頃

飯田心美

「戦国群盗伝」は昭和12年、東宝の前身であるP・C・L砧スタジオで完成され2月を期して日本劇場に封切された作品である。作品の出来ばえは後に述べるが我々の興味をひくのは同作の誕生前後にみられる日本映画界の動きである。当時、製作にのりだしてまもないP・C・Lは時を同じくして京都で製作開始したJ・Oスタジオと連携、配給会社の東宝と組み三者一体となってブロックを形づくった。ところがこの新ブロックの出現を快く思わない既成会社、松竹、日活、新興、大都は権益擁護のねらいから四社協定を設け、興行面、製作面その他あらゆる面で妨害した。それは昭和11年の秋から12年にかけての出来事で引ぬき防止の非常手段が四社側によってとられながらも数名のスターや監督は新ブロック側に移って行った。

いまにして思えばこれは戦後製作再開した日活と既成五社の紛争とよく似ておりその戦前版と称すべき事件だった。やがて新ブロック三者の合併により東宝映画として発足したのであるが入社した面々は俳優では大河内伝次郎、入江たか子、高田稔、霧立のぼる、岡譲二、原節子といった人気最高の人々また監督では山中貞雄、伊丹万作、熊谷久虎、滝沢英輔、渡辺邦男、石田民三といった一騎当千の連中で従前からP・C・Lに属していた成瀬巳喜男、山本嘉次郎、木村荘十二を加えると既成会社といえども侮りがたき陣容となった。

昭和12年といえば北支蘆溝橋事件に端を発して日支事件が持上った年で国内は臨戦体制の色が日ごと濃くなっていたがその社会的情勢の中で東宝は結成されたのである。滝沢は個人の自由を奪う四社協定をけって所属の新興キネマから東宝に入社したわけだが胸中にはB級監督以上になれない二流会社の下積みからぬけだしたいという熱望がたぎっていたにちがいない。事実、彼は昭和3年にマキノ・プロで処女作発表いらい「パイプの三吉」「仇討辻講釈」など佳作を出してはいたが所属する会社格が下位のため世評に上ること少なかった。意欲さかんな映画作家なら当然の行動といってよかろう。

加えて興味あることは、P・C・Lの製作方針である。タレント不足になやみがちの同社として一人でも味方をふやしたいのはムリからぬことで前進座への呼びかけもその一つだった。前進座との提携はこれを皮切りに数作つづけられて行ったがその中には「人情紙風船」のごとき秀作も生れている。それはさておき前進座起用が「戦国群盗伝」に始まっていることは記憶されてよい。脚本は山中貞雄が梶原金八のペンネームで書いている。元来このペンネームは山中、稲垣、滝沢そのほか京都鳴滝組と自称するグループの脚本用のもので各人が随時借用していたという。因みに山中は昭和12年8月に「人情紙風船」を完成直後、召集されて出征、中支で戦病死しているから「戦国群盗伝」も晩年の仕事ということになる。

この映画の原作は三好十郎の舞台劇「吉野の盗賊」で前進座レパートリイの一つといわれるがさらに遡ってゆくと作者三好はシルレルの「群盗」からそれを飜案したという。いづれにしても映画化にあたり舞台上演とかなりちがった形に改められていることは想像に難くない。ものがたりの背景も吉野から伊豆半島の天城山一帯に変っている。すなわち永録、元亀の戦国時代、全国に割拠する群雄の中でもとりわけ勇名をとどろかせていた小田原城の北条の傘下の小国領主のお家騒動から物語の幕が上げられている。

作品のねらいは戦国時代のロマンを活劇風にくりひろげるところにおかれた様子で画面にあふれるダイナミックな流動美に伝奇的興趣をあふれさせようとした意図がうかがわれる。登場人物の生活的裏づけよりも各人物が相ついで起る事件と共に立場の優劣を変えてゆく推移に魅力がわく、といった作り方である。その点フィクション性はつよくかつメロドラマ性も濃い。むしろ現実に遠いところが特徴とさえ言える。東宝では後にいたって「川中島」のようなスペクタクル戦国絵巻を好んで出すようになったが、ここではまだスペクタクルに達せず、もっぱらアクション・プレイに終始し滝沢の演出もそこに力を入れている。

配役は千葉早智子のほかは前進座の一党で固め河原崎長十郎が領主の長男から野武士の首領となる太郎、中村翫右衛門が野武士の甲斐六郎、河原崎国太郎が兄にそむく弟を演じている。なお猿丸になる市川延司は現在の加東大介でキヤメラは名手唐沢弘光が相当。第一部「虎狼」、第二部「暁の前進」と名づけ二部作として封切されたが昭和23年に改訂してまとめられ幾分短くなった。この作の封切された年度に他社からは「蒼氓」「淑女は何を忘れたか」「裸の町」「真実一路」「愛怨峡」「風の中の子供」「新しき土」などが送り出されていることも書きそえておく。

(3月8, 11, 15, 18, 22, 25, 29日, 4月5, 8, 12日の10回, 毎回2時から上映)

国立近代美術館フィルム・ライブラリー